

ぽたいたい!

源流のひとしづく

CONTENTS

- コラム
- 第4回 源流学講座
- 川上村見聞録⑤
- 源流のよりみち
- 源流人会活動報告
- 川上村の主役たち
- 交流のページ

ぽたいたい

源流のひとしづく

秋 第8号

発行所 ■ 財団法人吉野川紀の川源流物語 森と水の源流館
発行日 ■ 平成17年10月発行
TEL 07465・2・0888

住所 奈良県吉野郡川上村宮の平
財団法人吉野川紀の川源流物語
TEL 07465・2・0888
FAX 07465・2・0388
URL <http://www.genryuu.or.jp>
E-mail morimizu@genryuu.or.jp

交流のページ

このページは源流人会会員さんや、源流・川上村とつながる個人・団体のみなさんの活動紹介や情報交換の場です。

『はじめまして。私は、川上村の南隣の北上山村に在住の鎌田と申します。源流人会に入会をして、2ヶ月と日も浅く、まだイベントにも参加して無く、会報誌に載せていただくのにも気が引けます。私は、約10年前まで大阪市内に住み、長距離トラックの運転手をしていて、休みのたびに、この吉野地方へくり出し、山をよじ登ったり、源流部でアマゴ釣りをしたりする内に、「俺の住む所は、やはり山の中やな?」と思い始め、理解のある嫁さんと2人で引っ越ししてきました。川の底から山の頂上まで遊ぶ趣味を持つ私には、やはり最高な所で、土木作業を終え、帰宅後に晩御飯のおかずを釣りに、目の前の清流へビール片手に出かける始末です(笑)。大阪の友人達も子供を連れ年間を通じ、遊びに来てくれるのですが、おむつをしてギャーギャー泣いていた子供たちももう小学生の中学年です。いつの間にか大人になってこの吉野地方を、第2の故郷と思ってくれたらな~と思います。(鎌田誠明)



本の紹介

『ひみつの植物』

藤田雅矢著 WAVE出版

ピンクのたんぽぽ、真っ赤なヒマワリ、子供が乗っても沈まないハスの葉・・・そんな植物本当にあるの?と思われるでしょうが、それがあつたんです!世界広しと申しますが、この地球上にはあつた驚くような植物が秘かに生えているんです。奥が深い!しかも、お取り寄せが出来るので、簡単に手に入れる事が出来ます。また、育て方の難易度や、育て方のポイントまで書いてくれているので、とっても便利な本です。(K.K)



地域活性局と川上村

地域の活性化を目標に学生が集まった地域活性局。そんな学生を快く受け入れてくれた川上村と高原地区。川上村は広く、村全体の活性化は僕等大学二回生の残された2年では出来ないだろうと思ひ、フィールドを絞り高原地区に焦点をあてました。理由は、村の中心道から少し外れ、コンパクトな地域を形成しており、農産物の評判が良く、中でも美味しい蒟蒻や椎茸が取れること。森と水の源流館や役場の方々は村のイメージ向上などをがんばっているの、僕等はその中で実際の経済的な動きを促進させながら地域の人と輪を作り、地域の活性化に貢献したいです。地域活性局は貧乏学生の集まりで、活動もたかが知れていますが、あと2年間、できればその後川上村と一緒に歩んでいきたいです。

「森守募金 キャンペーン」が開催されました!

来年は2006年9月10日(日)

9月11日、第4回「森守募金キャンペーン」が開催されました。今回は「環境・共生・参加の地域づくりシンポジウム」や、「ひつつきむし展」のライドトーク、パネル展を同時開催し、遠くは大阪や和歌山、奈良市などから100名近い方に参加いただきました。日頃、森と水の源流館を応援いただくみなさまには、吉野川・紀の川流域の市町村や博物館・資料館の紹介、水や環境を守る活動をしている企業・団体の展示や、水源を守るための苗木の配布、野菜・こんにゃく・トチモチのチャリティ販売、工作体験などによるご協力をいただきました。募金もたくさんの方からお寄せいただきました。お寄せいただいた募金は副読本の制作や水源地の森の保全(啓発用看板の設置等)に使わせていただきます。ありがとうございました。来年は「森守募金キャンペーン」も第5回目となります。これからの一年間で出会える方々、応援いただいた方々との思いが、より一層深まる日とできるよう、取り組みについて検討をはじめたいと思います。スタッフ一同反省するところがたくさんありますので、今後は源流人会のみならずにも参加をいただきながら、2006年の9月10日をつくっていききたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。



源流人会募金!

源流人会とはかけがえのない水を生む源流の自然を愛し、源流を守り、育ててゆくことのできる人です。

源流人会には集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆくことのできる人です。

ともにも源流学を楽しみ学ぶ仲間を紹介ください!

年会費	個人	2,000円
	家族	3,000円
	学生	1,500円
	団体	10,000円

郵便振替 00940-1-331163

募金は次のような活動にあてられます

- 吉野川・紀の川の水について学ぶ副読本を作成し、流域の小学4年生に配布
- 「源流学の森づくり」事業
- 「水源地の森」の保全を呼びかけるための啓発用看板の製作と設置

郵便振替 00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて



最近畑作業にはまっています。森林浴、園芸療法など、心の癒し部分に注目され紹介されていますが、畑づくりにも同様の効果があると思います。

朝早く起きて畑を耕し、種を蒔き、虫食いに気を付け、肥料を施し、草引きをし、収穫をすることに何とも言えない喜びを感じ、肉体的にはきついのですが（年齢的なものでしょうか）、楽しみになっています。本格的に、畑をしようというのではないのですが、毎日のように畑は眺めています。そうして、「今度の休みには、これをしよう、あれをしよう。」と考えています。しかし、実際は奥が深く、というか簡単に良い収穫はなかなか得られないのが実態です。でも健康づくりも兼ね、はまっています。

たまねぎは、11月に畑に植えて、翌年の6月に収穫できます。その他の野菜は、半年もかければ（短ければ2ヶ月）結果がでます。こんなに早く結果が出ますが、万が一うまくいかなくても次が、来年があります。森と水の源流館の活動も、種を見つけ、種を蒔き、芽が出て大切に育てて、早く実るように、と様々な試みをしています。まだまだ成長過程でしょうか。



▲ ウリカエデ



▲ 水たまりの落ち葉



▲ トチの実



▲ ムサラキシキブ



▲ イタドリ種

9/17(土) 晴れ

今日は今年取り組んできた小屋づくりの続きのほうでした。しかし、台風14号による大雨の影響でなんと作業のための登山道が無くなっていました。そこで、まずは道づくり。鋤をもつて土をならしたり間伐材を使って、階段をつくらしたりして小屋までの道を開通させました。運んできた間伐材を辻谷館長操縦の架線かせんで小屋付近まで運び上げて初日の作業終了。その後は源流学の森で自然観察タイム。小魚をすくい上げたり、シカの足跡を見つたりしてワイワイと楽しみました。



▲ まずは崩れた道づくり



▲ 架線で運ばれていく丸太



▲ 棟上げまで完成

9/18(日) 晴れ

今日は源流人会の常連メンバーに加えて、吉野町の小学生がたくさん参加してくれました。大人組は達っちゃん先生こと辻谷館長の指導で小屋づくりの続き、子どもたちは河原付近の広い場所ですぎ丸太の皮むきと分かれて作業を行いました。スギの皮をナタガマでむいていくと中からカミキリムシの幼虫(?) なんかが出てきたりして、その間はしばし観察しました。子どもたちはそのうち川遊びに夢中になっていきましたが...

小屋づくりは前回までで柱と基礎が完成していました。今回は、人手も多く棟上げまでいけるのではとの声が多くながらばり成果で、棟上げまで終了です。館長からは「棟上げしたらゴクまき」ということでしたが、ここまで進むとは予想以上でお餅を用意していませんでした。ということで、今回は最初にゴクまきを行う予定です。お楽しみに。



丸太の中から出てきたカミキリムシ?の幼虫



▲ 丸太の皮むきに汗を流す

山上村の主役たち

下層植生調査では、みんなで顔をつき合わせて数をかぞえた水源地の森の木の子どもたち。今回はそんな実生を紹介しよう。

どんなに大きな木でも、どんなに長生きしている木でも、最初は小さなちいさな一つの種。親木たちはいろいろな工夫をして種を遠くへと運びます。ドンダリやブナの実はネズミやリス、カケス(カラスの仲間)など、森の動物たちに運んでもらいます。モミジやモミ、トガサワラの種は風が運びますが、毎年たくさん種の種や実がなりますが、運良く成長できるのはごくわずかです。

トチノキは条件がよければ、発芽から3ヶ月で50cmほど伸びるものがあります。しかし、暗いところでも時間をかけてじっくり成長するモミヤツガは、1年で2cmほどしか生長できません。木の性格もいろいろですね。



▲ 2才のトガサワラ



▲ 昨秋の台風で倒れたトガサワラの大木



▲ クロソヨゴ



▲ オオモミジ



▲ モミ



▲ ツガ



◀ フジに巻きつかれたヒメシャラ



ヒメシャラ ▶

今春、地面から顔をだした小さな木の子どもたち、1年後、10年後、数百年後にはどうなっているのかしら? 小さいながらも、森の時間を、出来事をよく知っている木の子どもたち。森を訪ねられたときは、ちよつとしやがんでみたり、同じ目線になるまで寝ころんで見てください。すると、何百年、何千年と世代交代を繰り返してきた、はるかな森の旅へとタイムスリップしたような気持ちに...

秋、ふかふかの落ち葉の上に寝ころんでゴロゴロしてみてくださいね。きっと、いろいろな発見がありますよ。そして、そこには小さくて広い世界が広がっています。

源流人会活動報告

水源地の森 下層植生調査9/3・4

下層植生調査は、森の中に低木、幼木、草が少ないことから、その原因を推測し、森の保全にむけての資料とするため、2003年秋からはじまった調査です。水源地の森の5ヶ所に、20m四方の柵を設けました。柵を設置したところは、シカなどの草食動物が入りませんので、柵の中と外の植物の生育状況をみることで、動物が与える影響が推測できるはずです。調査は、20m四方の中にさらに1m四方の調査区(小プロット)を5つ設け、そこに生育する植物の数と種類を年に2回、記録しています。



▲ 調査風景

今回は2日間で大プロットを4ヶ所、調査しました。残りの1ヶ所は後日、横田先生が調査してくださいました。ありがとうございました。今回も、柵内外の生育状況に差が見られました。引き続き来年も行います。みなさんご参加、お待ちしております。

*この調査は、メールアドレスをお知らせいただいた方にご案内させていただきます。コースが険しいため少人数で、健脚の方を対象に行っています。

参加者の声

6月に源流人会に入会して以来、初めて活動に参加しました。“下層植生調査”なんて言われても、「何するんだろう?植物の名前なんて知らないんやけど...」と少し不安に思いつつも、大好きな“水源地の森”に入れるのならと少々不純(?)な動機での参加でした。当日は台風14号の影響で朝から小雨がパラつき、「最後まで行かれへんかもしれないけど、行けるところまで行ってみよう。」と、山の神にお参りをし、森に入りました。

最初の1時間はひたすら登り。汗がふき出してきました。でも暑くても森は初秋の趣。ミズナラの実が落ちていたり、あちこちに色んなキノコが顔を出して目を惹かせてくれます。尾根道に出ると気持ちいい風が吹き抜けて、熱った身体を通りぬけ、さつきまでの汗がすーっと引いていきます。

そしてやっとたどり着いた最初のポイント。まずは鹿除けの柵の中に入り、分担したプロットを調べます。1m四方のプロットに3人で頭をつき合わせて、「これはオオモミジやな?」「これはヒメシヤラ。」「あつーこつちにも!」「コレ数えたっけ?」三人で芽吹いたばかりの木の子ども達を数えて記録します。最初は記録係として名前や、本数を書き込んでいたのですが、そのうち特徴的な植物は少しわかってきました。するとこれが楽しい!しかし、芽吹いたばかりのモミ・ツガ・トガサ



▲ 柵外のプロット (No.16) 草木がほとんど生えていません。



▲ 柵内のプロット (No.12) 8種類の草木とコケが生えています。

ワラは似ていて見分けがつかず、結局最後まで、特徴をつかむことができませんでした。誰にもわからない植物が出てくると、横田先生の出番。すると先生は葉の状態、時には葉のにおいをかぎながら「これは〇〇ですよ。」と教えてくれます。さすがです!今度は柵の外のプロット。しかしこつちは簡単!



ほとんど何も生えていないか、あっても2~3本。改めて鹿の食欲に感じました。こつちや2ヶ所のポイント(柵の中と外を調べて)をまわりました。気づけば、雨は止み、薄日もさしてきて森が明るくなり一層美しさが増えました。人の手がほとんど入っていない森には、いたるところに大木があり、森の歴史を感じます。この森がいつまでもゆるやかな時間を重ね続けてくれることを願ってやみません。

帰り道には、トチの大木がたくさんの実を落としているのを発見!みんなワイワイ拾ったり、少し寄り道をしてカツラの太木にも会いにいきました。カツラの落ち葉を拾うとほんのり甘い香りがして、もう秋が来ていることをおしえてくれました。

調査なので“大満足!”と表現するのはおかしけれど、それでも森にどっぷり浸って過ごした一日は最高にシアワセな一日でした。また絶対参加したいなあ、と思います。(川西千穂)

源流学講座



川上生まれ川上育ちの達っちゃん(辻谷達雄館長)は、50年以上の仕事のベテラン。その長い人生の経験から、自然とともに生きる力や知恵などを笑いのエッセンスを加えてお届けします。

第四回 基地&山小屋造り

〜思い出編〜

わしが川上第三中学校を卒業したのが昭和24年3月20日。今から56年前になるが、72才になった今も地下タビに麦藁帽子というファッションで山を歩いている。これがわしの制服である。中学校を卒業したその年の4月1日より山の仕事に従事したと同時に、4月1日から日記を書き始めたので、現在56冊目を書いている。その中から、初めて泊まり山に行った日記帳(昭和32年)の中味を原文のまま紹介する。笑うべからず。

昭和32年7月18日 天気曇後雨
(いよいよ今日より井光の山へ入山することになった。早くから荷物をかついで家を出る。生まれて初めての泊まり山、その気持ちなんとも表現のしようがない。しかし一つだけ心残りになることがある。それは彼女の...8時半ごろやつと小屋に着いた。あいにく雨降り。入山を祝ってくれたのは雨だけか?なんだか仕事に來た感じよりもキャンプにきているようである。山の夜は涼しい。

わしが23才の夏であった。わしのグループは30代の結婚している人が3人と、結婚前の若い衆が4人と7人のグループで泊まっていた。夜の時間が長いのでランブの光だけで本を読んだり書物を読んだりした。ランブの光も最初は暗いが、3日目ぐらいになると、だんだん明るく見えてくるものである。夜の時間が楽しかった。ギターやアコデオンを持っていったので、作詞・

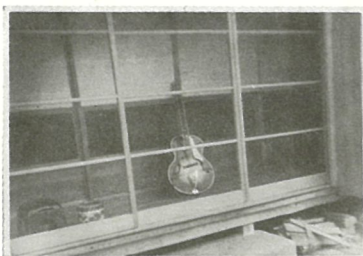
作曲して歌をつくった。その代表作は“吉野川エレジー”。誰かの失恋を歌にした。ちなみに、わしはギターをひいていた。今はそんなことを言っても誰も信用してくれない。「そんなグロブのような手で?」
何よりも一番面白かったのは、ネズミをロープでたたくことであった。ネズミの通るところにロープの寸法を定めておいて、みんなでジャンケン等して、わいわいさわいしているとネズミが安心して後ろを通る。それを向かい合っている一人が目でサインを送る。ロープを持った者が後ろをふりむかず、ジャンケンしながらバックをたたくといちコロである(*)。ハツカネズミといつてからだの小さなネズミがたたくと、油のビンにフタをするのを忘れると、ビンの中で数匹死んでいたり、米の袋に穴をあけては米をどこかへ運んでいた。全員が下山して2~3日して行く。

万年床の寝具の中に米を運んでいた、つるである。ネマキのたもとの中には米を運んだりしてあった。万年床というのはフトンを敷いてある場所に2つおいて置き、夜寝るときに広げる。いつも同じ場所より動かさないのが万年床という。ネマキというのは現代風でいうとパジャマのことである。昔の人は、寝る時はフンドシ一丁にネマキ一枚。冬でも同じスタイルであった。故に達者な人が多かった。ちなみにわしは、冬でも夏でもパンツ一丁に上はシャツ一枚。冬でもコタツはしない。習慣とは恐ろしいものである。

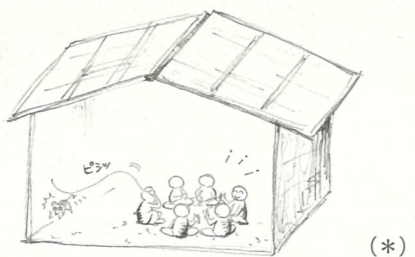
そんなことはどうでもよいのだが、やはり泊まり山での楽しみは食べることだった。共同生活なので皆で同じものを食べるわけだが、どうしてもうまいものから先に食べるのは人情で、まづいものは最後まで残ってしまう。当時、五色煮といって、うすい木箱に五つの

種類のオカズが入っていた。その中で一番うまかったのは豆であった。先に豆をよって食べたので、一番まずいスルメのアマダキが最後まで残った。何日か経った日、「豆を先によって食べるのは達ちゃんや」ということになり、最初から人数分の七等分に分けられた。しかたなくスルメを喰うはめになったことを思い出される。喰いものうらみは昼も恐ろしいものである(笑)。食べもので一番辛かったことは、オカズがなくなつたとき。あと二日で下山するので、今残っているもので皆しんぼうしようということになった。残っているものは生のタマネギと味噌だけ。生のタマネギに味噌をぬって食べた。一日くらいはうまいと思つて喰つたが、そのあとが大変だった。小屋の中がタマネギの「へ」をこいてくさいといつたら言葉では言いあらわせないような状態になったことは今でも忘れられない。特に音の出ない「へ」は特別くさい。今回は49年前の日記帳より想い出の1頁であった。

源流の山小屋づくりも徐々に進行しています。源流人会の皆さんのご協力、よろしく願います。



▲昭和28年11月。上多古区敬老会でのとび入り演奏。向かって右から2人目が21才の館長。



(*)



▲昭和33年。西/峯古木切りの時。館長26才。

川上村見聞録 5

*このコーナーでは、民俗担当の黄瀬桂子が村で見たこと聞いたことを「川上村見聞録」として紹介していきます。

畑仕事にまつわることわざ・知恵

川上村は村の95%が森林で、林業で生計を立ててきた山村です。この村のお年寄り、自然と共生する様々な知恵を持っておられます。長い年月をかけて先祖から受け継いできた知恵や技の数々は、どれもこれも川上村の宝です。ことわざには先人達の教えやユーモアが隠されています。この地で生きる人々が、長い年月をかけて培った民俗を記録・保存、全国に発信していくこと、これも森と水の源流館の大事な使命です。現在進めている民俗調査の結果は、皆さんのメッセージを未来へとつないで行けるでしょう。



▲ S27年頃、五穀豊穡を祈る丹生川上神社上社の「八朔祭」。(中居源三氏提供)

◆ 畑は朝日が当たるほうがよい
朝日が当たる土地は、作物がよく育つ。

◆ なすびの花に仇花ない
なすびの花は全部実になる。ハズレがない。

◆ 栗の花咲いたら プンド植える
プンドは豆の一種。種まきの時期を伝えることわざ。

◆ 柿の葉に雀が隠れる頃になったら粟をまく
粟は闇夜の日にまくと不作
オッサンと粟の穂は盆に出る

◆ オッサンは「お坊さん」のこと。作物の生育をつたえることわざ。盆の頃に粟の穂が出るように生育せよ、ということ。

◆ ワケギとソラマメは八朔の音頭 土の中で聞け
種まきの時期を伝えることわざ。井光集落では、八朔(*1)に盆踊りをした。ワケギとソラマメは、八朔の盆踊りする日(8/31)までに植えておかないといけないということ。「音頭 土の中で聞け」と表現している。

◆ ソラマメの花ざかりに雷なったら不作

◆ 雷ようなる年は 小豆ようなる
◆ 十月の闇夜に大根は音を立てて大きな
作物の生育を言い表して。「ちようど10月に大根は大きくなる」。

◆ 春は火早いから畑焼いたらあかん
かつては土地を肥やすための焼畑をしていた。井光集落では焼畑をしたり「同じ作物ばかりでは土地がもたんのので、作物を作った後は杉を植えていく」という。

(*1) 八朔とは、旧暦八月一日をいう。民間習俗としては豊稔祈願や盆行事の最後などと意識される。

山仕事にまつわることわざ・知恵

◆ 山にはヒダル神がいるよって、弁当を一口残しておけ
ヒダル神は、取り付かれたら空腹で動けなくなるとされる神。ヒダル神に取り付かれたとき、一口食べたら離れてくれるから、という。村では今でも、一口残して弁当箱を閉じる山の仕事師さんを時折見かける。

◆ 木挽きと木挽きと一升めし食うて
牛の寝たような糞垂れて
「こびき」とはマエノコギリをひく人のこと。こびきは体力を使う仕事で、1升めしを食べる人もいるくらい大食いの人が多かった。「こびきは、三重県松阪から来ていた。村の人ではいってなかつたように思う。」と

源流の森

柏木・阿弥陀ヶ森

昨年、世界遺産に登録された「紀伊半島の霊場と参詣道」。川上村の柏木という集落からは、山上ヶ岳・大峯山寺への登山道があり、戦前は山上参り(行者)でにぎわっていたそうです。昨秋、柏木生まれ柏木育ちの館長の案内で、阿弥陀ヶ森まで行ってきましたので、紹介します。

柏木へは、当館より国道169号線を、上流にむかって約10kmの距離。山上参りににぎわいをみせていた頃は、商売人が泊まる宿もあわせて5軒の宿がありました。また、わさび味噌や蒸パン屋などの土産物屋にカフェ、芝居小屋もありました。奈良交通バスの発着も今より数が多く、山上参りや行商人、通りにたくさんの人が歩いていました。館長が子どものころ、なき声の美しいカシガエルを山上参りに売って、そのお金で買った蒸パンはゴマがふりかけてあって15銭。「そららにぎやかやった。柏木は国際都市やがな(笑)」。

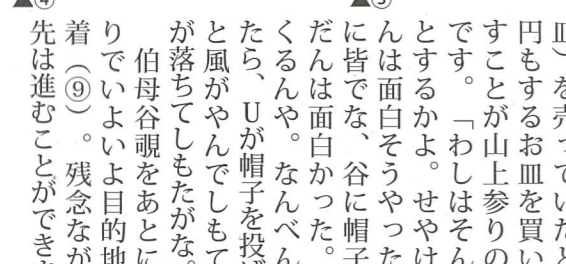
では、この柏木から阿弥陀ヶ森をめざして行きましょう。登り口の標高は350mあまり。階段を少し登ると八王子神社(はっちょうさん)があります。もともとは集落の上にあったのですが、50年近く前に今の場所に引っ越してきました。狛犬は、館長がかついで運んだとのこと、「今の若い衆はよう運ばんのとちやうけ?」



▲1



▲2



▲3

▲4 皿)を売っていたとのこと。1枚約10円もするお皿を買い、それを谷に飛ばすことが山上参りの楽しみだったようです。「わしはそんなもったいないことするかよ。せやけど皿が飛んでゆくんは面白かった。風で帽子が返ってくるんや。なんべんも投げて遊んどつたら、Uが帽子を投げたときな、びたつと風がやんでしもて、ありや、帽子が落ちてしもたがな。(笑)」

伯母谷観をあとに、約30分の軽い登りでいよいよ目的地、阿弥陀ヶ森に着(9)。残念ながら女性はこれより先は進むことができません。山上ヶ岳・



▲5



▲6



▲7

▲8 (S.36)

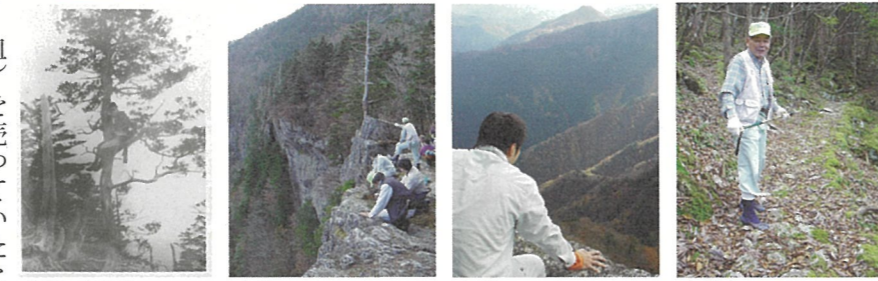
▲9 阿弥陀ヶ森の女人結界門

▲10 山上の本堂で。館長32歳

てあったそうです。茶屋峠から登ると1時間半。上谷という集落から登る道と合流します(1)。戦前まで、郵便屋さんはこの峠道を通って配達していたとのこと。ここからしばらく尾根道を登ってゆくと(2)、川上村有林があり、杉・檜が植えられています。「わしが子どものころ、戦中戦後やな、ここまで歩いてジャガイモを植えるに來たんや。」

さらに道を進み、標高が1600mにもなると、林は人工林から落葉広葉樹にかわります。空気はひんやり、木々は赤や黄に色づいています(3)。足元に目をやると、土の道から石畳にかわっています。「わしのおやじらが石を敷いてつくったんや。小さいころそない聞いたわ。この道はいまだにびくともせんあ。」(5)

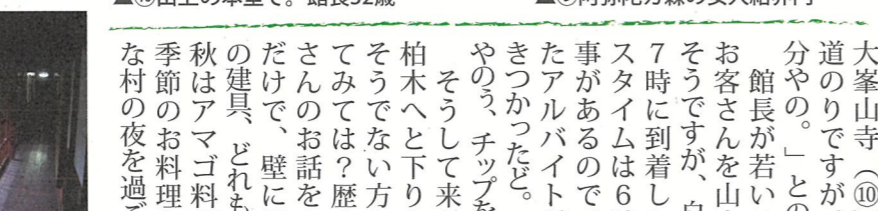
最後に急な谷の登りを越えると絶景の伯母谷観です(6⑦⑧)。断崖絶壁から見渡す景色は吸い込まれそうな谷。遠くには上北山村の和佐又山ヒュッテが見えます。昔、柏木のたつみひょうべえさんが、ここでかわらけ(十盞の皿)



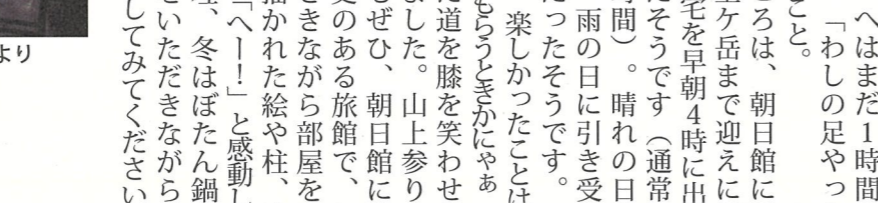
▲6



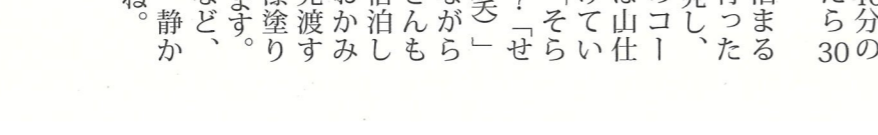
▲7



▲8



▲9



▲10

大峯山寺(10)へはまだ1時間40分の道のりですが、「わしの足やたら30分やの。」とのこと。
館長が若いころは、朝日館に泊まるお客さんを山上ヶ岳まで迎えに行ったそうですが、自宅を早朝4時に出発し、7時に到着したそうです(通常のコースタイムは6時間)。晴れの日には山仕事があるので、雨の日に引き受けていたアルバイトだったそうです。「そらきつかった。」楽しかったことは?「せやのう、チップをもらうときかやあ(笑)」
そうして来た道を膝を笑わせながら柏木へと下りました。山上参りさんもそうでない方もぜひ、朝日館に宿泊してみたい。歴史のある旅館で、おかみさんのお話を聞きながら部屋を見渡すだけで、壁に描かれた絵や柱、漆塗りの建具、どれも「へー」と感動します。秋はアマゴ料理、冬はぼたん鍋など、季節のお料理をいただきながら、静かな夜の夜を過ごしてみてくださいね。



▲1 曲げ物の弁当箱。村ではメンツと呼ぶ。



▲3 中央のふくらみに入っている。このオチガイは長さ約170cm。

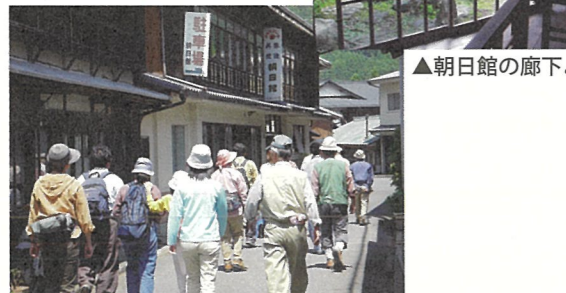


▲2 メンツをオチガイ(筒状の袋)に入れる。



▲4 オチガイを腰にまく。モデルは辻谷館長。

▼ 柏木の町並み



▲ 朝日館の廊下より